

第IV部門 大都市間都市群の現状と今後の都市開発戦略

関西大学工学部 学生会員 ○岡本 信秀  
 関西大学工学部 正会員 北詰 恵一

1. 研究の背景と目的

本研究は人口減少下における日本の大都市近郊都市域の有効活用の促進について述べたものである。日本の人口は2005年にピークを迎え、今後相当な期間にわたり減少していくことが見込まれており、それとともに都市の建設および維持にあてられる資金も減少してゆくものと考えられる。そのような中で、本研究ではすでに新規開発が一段落している大都市近郊の都市に注目した。そしてそのなかでも大都市に囲まれたエリアに存在する都市を特に大都市間都市と定義した。この大都市間都市はその地理的な優位性および長期にわたる開発にもかかわらず、マンションの乱立といった無秩序な開発がそこかしこに見られ、到底適切な開発が行われているとは言いがたい。そのような現状を踏まえ、さらにその特徴を細かく分析することにより、既存の都市のストックを活かし、より魅力的な街として人々の受け皿になるような都市開発を行うための下地を作ることを目的とする。

2. 研究対象地域について

本研究における大都市間都市群は、大都市近郊の都市の中でも2つないし複数の巨大都市に挟まれたエリア内にあり、かつそれらの都市を結ぶ経路上にある都市の集合体を意味する。また大都市間都市以外の近郊都市のうち、比較的近年に戸建住宅を中心とする開発が行われた都市を新興郊外都市とした。そのうえで、大都市間都市群の特徴を明らかにするために三大都市圏内の諸都市を、また巨大都市・新興郊外都市との比較に際しては阪神間の諸都市を用いた。これに関して、具体的

には図2に示すように阪神間の諸都市を大都市間都市群として、またその比較先として阪神間の両極に位置する巨大都市である大阪・神戸両市と、新興郊外都市として80年代から開発が進んだ三田市を選んだ。

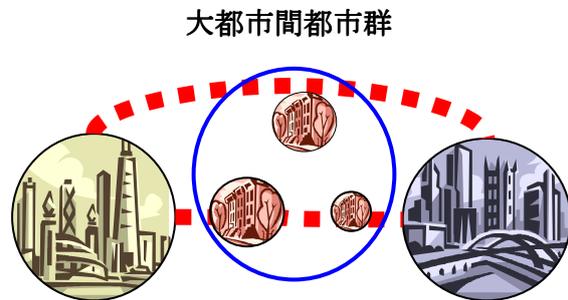


図1 大都市間都市群概念図

3. 大都市間都市群の現状

国勢調査等の統計資料を用いて、国内のその他の大都市間都市を含めた昼夜間人口比を表1に示す。なお、青ラベルが大都市間都市、黄ラベルが新興郊外都市である。

表1 夜間人口に対する昼間人口の割合 (H12)

都市名	割合(%)	都市名	割合(%)
東京(区)	137.5	春日井市	88.5
市川市	77.8	岐阜市	106
船橋市	81.7	大阪市	141.2
千葉市	97.2	尼崎市	96.3
青梅市	91.0	西宮市	87.8
春日部市	79.0	神戸市	103
名古屋市	117	三田市	88.1

この表からわかるように大都市近郊に位置している都市では総じて昼間人口が少なくなっていることがわかる。

次に表2として全住宅に対する集合住宅の割合を示す。こちらは多くの大都市間都市で新興郊外

都市よりも共同住宅の割合が大きいという状況が明らかになる。

表2 全住宅に対する集合住宅の割合 (H10)

	住宅総数A	共同住宅数B	B/A(%)
市川市	179,390	108,060	60.2%
船橋市	194,980	106,290	54.5%
青梅市	45,370	18,070	39.8%
春日部市	68,940	28,450	41.3%
春日井市	95,220	35,780	37.6%
尼崎市	182,040	101,580	55.8%
西宮市	159,920	99,200	62.0%
三田市	29,520	9,290	31.5%
全 国	43,922,100	16,600,900	37.8%

さらに表3は阪神間の尼崎市および西宮市の就業先を表したものである。これによると自市で就業している人は4から6割であり、両市とも3割の人々が自市外で就業していることがわかる。

表3 尼崎市・西宮市就業先 (H12)

尼崎市	人数(人)	割合(%)
就業者数	224,589	100.00%
市内で従業	129,484	57.70%
他県で従業	64,391	28.70%
西宮で従業	8,646	3.80%
西宮市	人数(人)	割合(%)
就業者数	207,432	100.00%
市内で従業	86,074	41.50%
他県で従業	70,204	33.80%
尼崎で従業	14,699	7.10%

図2は平成12年の西宮市の人口ピラミッドを示したものである。この図からわかるように、西宮市では30代後半から40代にかけての人口が他の年齢層に比べて著しく少ない。この年齢層は働き盛りの人々であり、平均的な家庭であれば小学生ないし中学生の子供がいる世代であること、また、いまだ根強い戸建て住宅志向を勘案すると、この年齢層の人々が少ないのは郊外に戸建て住宅を買い求め、移住する人が多いからであると推測できる。

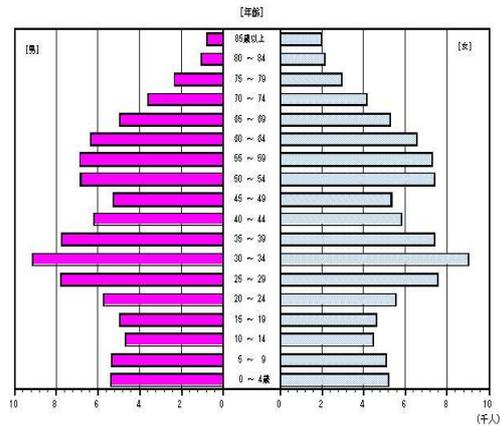


図2 西宮市人口ピラミッド (H12)

ここまでの事柄を総合すると、少なくとも大都市間都市たる西宮市では、多くの人々がマンション等の集合住宅に暮らし、近隣の巨大都市に通勤しており、ある年齢になると家庭を築き、子供が大きくなると郊外の戸建住宅に移り住んでいるという現状がうかび上がる。

#### 4. 結論

人口減少下の日本における今後の都市開発を考えるとき、すでに各種の豊富な社会資本ストックがある大都市間都市群の有効活用が望ましい形であると考えられるが、そのためには郊外に流出していく人々をつなぎとめる、すなわち働き盛りの人々の定住化が必要である。そのためには、現状の単に住むための器として建物を造るだけでなく、人々が魅力的であると感じるような街を構築してゆく必要があると思われる。

#### 5. おわりに

本研究で残された課題として、働き盛りの人々の定住化策の具体的な考案が挙げられる。これは街の魅力の向上とともに様々な政策によってなすことができるのではないかと考えられる。また、実際の大都市間都市群の住民を対象としたアンケート調査を行い、どのような街あるいは条件があれば住み続けるかといった趣旨を問うアンケート調査を行うことも有効であると考えられる。